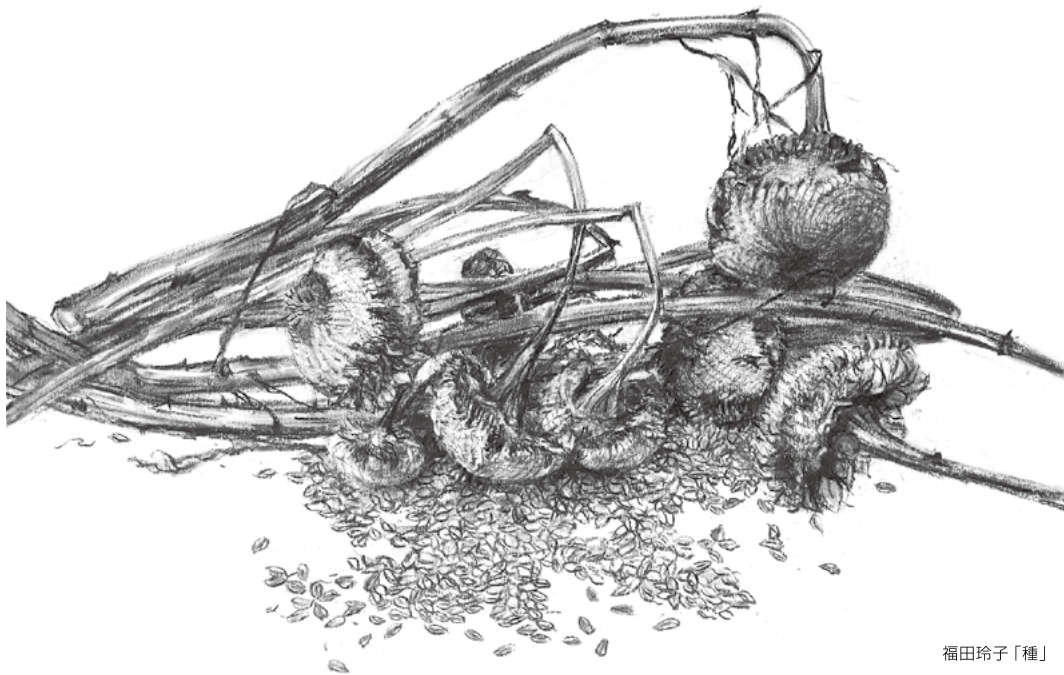


主体美術

SHUTAI-BIJYUTSU

主体美術協会は、1964年9月に結成されました。
私たちは作家一人一人が創作を自由に発表できる場を確保し、美術家の集団として積極的に活動していきたいと思えます。
私たちは世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒168-0063
東京都杉並区和泉4-36-10
齋藤典久 方 TEL / FAX 03(6786)1006



福田玲子「種」

2024.8 No.115

CONTENTS

1p 巻頭言 ……水村喜一郎

2~7p 特集

「初入選の頃を振り返って」

石井 晴子 伊藤 博昭
上野 信彦 多田 欣子
柿崎 覚 門屋 武史
グエン・ディン・ダン
篠田 正美 橋本 礼奈
前川 アキ 水野 博子

8p 第59回主体展 企画展示

「私の仕事 いま・むかし(Ⅲ)」

借別 「森田六男さんを偲んで」
……………桑原 雄一

ART WAVE

9p ●アトリエ訪問 vol.13

「福田玲子さん」
一取手市の自宅を訪ねて
……………落合 梨乃

10~11p ●各地の美術展から

新会員と会員小品展
……………込町 勝治
中部作家展……………竹内小夜子
神奈川作家展……………長澤 弘美
武蔵野作家展……………新野安紀子
ちば作家展……………肥田野紅美
関西作家展……………見藤 瞬治

12p インフォメーション

展覧会記録・編集後記・その他

「主体展に出品して」

水村喜一郎

何年か前、上京した折に欲しい絵具があったので学生街の絵具屋さんへ行ったら、「油絵具はもう置いてません」と。エッと驚いて大通りの向こうのもう1ヶ所でも欲しいのは無かった。それじゃあと坂を下りて老舗の画材屋へ行くが、やっぱり欲しい絵具は無かったのだった。昨日40年ぐらい前からお世話になっている近くの絵具屋さんへ、主体展へ出品する絵の仮枠を頼みにいった。その時今話をした。すると、「今はもう殆どの絵描きさんがアクリルじゃないですかね。水性で速乾で便利らしいですよ。油絵具はいずれ消えるんじゃないですかね。それに新しい画材もいろいろ出て来てますし。」街の中から絵具屋さんが消えていって久しいが、今はネットで買うのが多いらしい。大作用の額縁はレンタルもあるとのこと。これまでの物が忘れ去られて行って次から次へと新しい何かが。そしてそのスピード感には驚くばかり。それでももう自分は今まで通り油絵具で、今まで通り絵を描いてゆくしかない、今更かえられない。

毎年毎年49年間主体展へ、ああでもないこうでもない画面をいじくりながら出品して来た。もうそんなにも長い月日が経っているとは到底思えないが、やっぱり時が流れたんだらうな、と思うしかない。しかしあの当時、主体は若かった、自分も若かった。第10回展初出品旧都美術館の裏手の1階の彫刻室。あの時の気持ちは未だに忘れられない。おすおすと入口から。耳たぶが熱く上気して興奮しているのを、冷静に冷静にと言いきかせ、ゆっくりと鑑賞している風に装ってはいるが、他の画家さんの絵は目に入らない。そして自分の2点の絵の前に立った時のドキドキの感激は今も覚えている。帰りの公園の樹々の間の清々しい風が気持ちよかった。当時主体展は小さい団体ではあるが、若くて実力のある画家が集まっているので、これからも絵を描いてゆくなら主体展をと。

そして大野五郎氏と寺田政明氏を紹介された。この両先生にお会い出来るとは思いもよらなかった。夢のようであった。10代の頃から美術誌や美術の本をめくると、よく見かけた名前の活字で「新人画会」とか「池袋千

ンパルナス」の記事と共に載っていた。この絵描きさん達の絵は好きで憧れていた。権威に阿らず自由に自分勝手に色と形で自分を表現している。その人達のいる主体展に出品出来たのは幸せであった。あんまり他の展覧会は知らないけれど、僕が前に出していた所は師と弟子の上下関係が強かった気がする。今はどうなのかな。主体展は横つながりの方が強いのでは。何となく根底に皆同じ画家、仲間という感じ。以前は絵を発表する場は上野の山の団体展か、個人の個展かで賞と名のつくのは、僕の知ってる限りでは2つぐらいだったと思うが、今はもうどんどん変化してさまざま。イラスト、アニメ、漫画風もあり賞やコンクールも数知れず。これから先のことは誰にもなかなか読めないのではないかなあ。だけどこれまで連続と続いて来た美術運動としての団体展は続くのだと思う。ことに主体展は小さいだけに風通しよく絵描きさんの一人一人が地道にコツコツと自分の道を歩いている感じがする。派手ではないがシッカリと画面と対峙している絵描きの集団。

最近ある居酒屋で若い女性に「水村さん画家なんですってね」「エエッマア」「私絵が大好きです。どんな絵を描いてるんですか」「いろいろですが今度画集見せますよ」「嬉しい、楽しみだわ」。他日画集をパラパラとめくり開口一番「有名?」「無名に近い、いや無名だな」いきなりの質問にブツ魂消た。それから会うことはなかった。絵を描くことは自分自身のために自分自身を描きたい、自己表現をしたいと思って描いて来た。そして絵だから見られることを運命づけられている。皆が皆そうだとはいふ論思わないが、先の若い女性の「有名?」は今の世の中の一部を照らしているのかも知れない。有名になりたいのであれば、他に道がいっぱい今の世の中にはあるのではないか。

主体はこれからもジックリと絵描きさんがそれぞれに良い絵を、絵の議論をしながら時には言い合いもして、横のつながりを大事にして主体美術らしくて。

「初入選の頃を振り返って」



創立60周年を前に、3年連続で「私の仕事 いま・むかし」という企画展を開催して来ました。今回はそれと関連して、11名の会員に「初入選の頃」を振り返っていただこうと特集を組みました。どういうきっかけで主体展に出品するようになったのか、初出品の作品に対する想いやその時に感じた印象など、あらためて教えていただきたいと思います。各人が主体美術とどうかかわってきたか、はじめて何う話もあり時代を感じますが、これから主体展に出品しようとする方たちに参考になればと思います。

なお、執筆には当時の作品写真を掲載させていただきました。(初入選の作品写真がなくてその後の作品を載せた方もいます。図録に出品者の作品が掲載されたのは第21回展[1985年]以降です。)(五十音順に掲載)

「初出品前の恐怖」

石井 晴子

主体展の初出品の作品も、何回展かも記憶になく、原稿依頼が届いた時、原稿を書く資格がないと思ったのですが、断る勇気も無く、ペンを取りました。今から45年程前になりますが、娘が脳腫瘍を患い五歳で亡くなり、私は悲しみのどん底、暗い穴の中で重い扉を閉めもがき苦しんでいる頃でした。何かに没頭することがどん底から引きずり出してくれるのではないかと、専業主婦になってしばらく休んでいた絵を少しずつやり始め、次第に無心の状態の自分を発見することが出来ました。

その頃の私は絵の内容はどうでもよく時間を埋めて、夢中になれたら良かっただけでした。初出品の作品は、どの作品かは確かではありませんが、その頃ピエロを沢山描いていたので、ピエロがテーマの作品であることは確かです。なぜピエロをテーマにしているのかと、ピエロを描かれていた松井先生はじめ色々な方に聞かれましたが曖昧な答えしか言えませんでした。

その当時私は子供の絵画教室をやっていましたが子供たちは楽しみにしていて、教室は午後なのに、朝早くからスケッチブックを入れた大きな袋を持って家の前に立っている子供や、幼稚園を休んでも教室には来る子もいたり、娘の死で長く休んでもいられなく、作り笑いをしながら子供たちを喜ばせなくてはいけなかったし、娘の仲良しだった子もいて、笑いながら、泣いて、私はピエロでした。なぜピエロ? の答えはこういうことでした。

なぜ主体展に出品したのかは、大学の先輩、後輩が沢山いたことの安心感だったと思います。大村、磯村、塩水流、加藤、田中、種倉、中沢、中城さん等です。私の夫と大村先生は面識があったので、私が出品することを電話で連絡したのはいいのですが、先生は作品をアトリエに持って来なさいとのこと。松戸から高田馬場まで、免許を取ってまだ一週間、首都高速は怖いから一般道で、今のようにナビは無し、隣で夫に地図を広げてもらい、やっとの思いで到着しました。怖い運転と先生に会うことで、コリコリに緊張した割には、「まあ、いいんじゃないの」で終

わりあとは雑談、私の緊張が緩んだ時、「ついでだから磯村のところにも行ったらいいよ」と言われ又緊張、磯村先生は「俺の絵と違うからわかんねえなー」この一言でした。

初出品の絵を忘れても、恐怖の運転だけは忘れることはありません。初出品は40年位前だと思います。



「夕食の後で」F 80 第21回主体展(1985年)

「出会いと転機」

伊藤 博昭

主体展に初めて出品したのは2009年でした。当時28歳。その数年前、当時地元の展示会に出品していた私は、そこで主体の元会員の富田さんに出会い、主体展を知ることになりました。富田さんのアトリエにお邪魔し、そこで拝見した作品は非常に大きく、地元の展示会で見る絵とは雰囲気違ってました。建築士の富田さんの絵は、絵というより建築構造物か何かのようなものでした。

主体展では、富田さんの作品と同じように大きくて質の高い作品が見れるのかという期待を持ち、上京して展示会を見に行きました。会場を一周しただけで、そのエネルギーに圧倒され、ものすごく消耗したのを覚えています。一つ一つの作品が、ただならぬ何かを放っていたので、鑑賞にもエネルギーが必要でした。イラストから絵の世界に入った自分には、こんな世界があるんだと、ただただ驚くばかりでした。

そして、すっかり気に入ってしまいました。その後、他の展示会も周ってみたのですが、あらためて主体展に感じたことは、誰かの影響を受けたような同じような傾向の作品が見られず、非常に自由度が高いということでした。自分もここでなら、何か表現したものを真正面からみて評価してもらえないのではないかと感じました。

初出品に際して、初めて大きい絵を描きました。子供の頃から気づけばずっとイラストを描いていたので、初めて描いた大きい絵は、大きいだけのイラストだったかもしれません。しかし、力のこもった作品だったことは間違いなく、そこを評価していただけたのか、初入選、新人賞と佳作作家に選んでいただき、心から喜んだのを覚えています。酷評が多かったのも覚えています。しかし、同じくらい応援してくださいる声もあり励まされ、自信もつきました。

出品者として出品していた数年間は、会員の人を会場で見かけては、自分の作品の批評を聞いて回っていました。なんとなくですが、会員の人たちが納得する『質』の作品が描けるようになれば、内容は作家一人ひとりにゆだねられているようだったので、会員になれるのではないかという期待を持っていました。毎年会員の方々に話を聞いて回ることで、自己流でやってきた自分は、絵画という表現方法を学んでいたのだと思います。

初心を振り返る良い機会でした。改めて、今後も精進していきたいと思いました。



「墮天使」横270cm×縦190cm 第45回主体展(2009年)

「思いがけず初入選」

上野 信彦

私が初めて主体展に出品したのは、2013年でした。当時、「絶対入選する」という意気込みがあったわけではなく、誘われたので「ためしに出してみよう」ぐらいの軽い気持ちだったことを覚えています。もちろん、この時点までは100号といった大きなサイズの絵を描いたこともなく、狭い家の部屋の中でどう大きな絵を描くかのセッティングから苦労したことを覚えています。「せっかく出すからには、100号を2枚出そう」と思っていたので、1枚描きながら同時並行で2枚目を描くために、狭い中で半乾きの油絵を入れ替えるのも一苦労でした。尚、今はアクリルに変えたので乾きやすく、入れ替えに問題ありません。

当時は静物画を中心に絵を描いていましたが、100号の大きさに耐えるモチーフを組むことが出来ないため、ヨーロッパに旅行した時の風景写真からモチーフを探しました。モチーフ探しの中で意識したのは「大きな構図」。イギリスの小さな街で見た大きな赤いパラソルのある風景が、画面に大きな赤い色面が入るので効果的であろうと思って描いたのを覚えています。

とにかく100号のサイズを描くのが初めてという事もあって悪戦苦闘、部屋中に絵の具をまき散らしながら描きました。この当時の私の部屋の光源が黄色味を帯びた電球で、搬入で家の外に出た時の色を見てあまりの色の違いにびっくりしたことを覚えています(その後、部屋の電球を変えました。良い気づきでした)。

入選の連絡を頂いた時は「本当に私の絵で入選して良いの?」と思いましたが、実際に東京都美術館で絵が並んだ際や会場研究会で会員の方にアドバイスを頂いた時ただただ恥ずかしく思った事を覚えています。その後、幸いにも絵を描き続けることが出来て、主体展に毎年参加できていることを嬉しく思います。

今回この原稿依頼があり久しぶりにこの絵を見ましたが、懐かしくもあり、(今でも)恥ずかしくもある複雑な気持ちです。ただハッキリと言えるのは、あんまり自分自身はこの時と変わっていないなあ、という事です。

今でも自転車がある街角の風景を中心に、本来街角にいるはずの人の存在が欠けている少し喪失感のある寂しい風景を、モノトーンを基調として描いています。今後もあまり変わらないと思いますが、より自分なりに納得できる絵を模索しながら主体展に参加し続けたいと思っています。



「赤いパラソル」F100 第49回主体展(2013年)

「初入選を経て変遷してきた私の仕事」

多田 欣子

初入選は1993年頃だったように記憶しています。当時は絵描き仲間と油絵道具を持って、真鶴港や川名漁港、下田の小さな漁港、さらに地方へと、時には泊まりがけで出かけていました。絵描き仲間の中には上野の都美術館へ出品している人もおりました。私も仲間に刺激されて上野の公募展を見てまわり、その中で主体展に心が惹かれ、応募したいと思うようになりました。

当時出品した絵は、網を主に浮きや船、テトラポットなど、F100号を2〜3点出品し、その内の1点が入選しました。ですが、会場に展示された私の絵に力不足を感じ、もっと絵の中に心打つ、訴える何かがあると常に思っていました。

そんな思いから、一人で西伊豆や千葉の漁港などをスケッチしたり写真を撮ったりして歩きました。中でも2年連続して夏に、2泊3日の行程で石巻湾から八戸まで、三陸海岸の海岸線を歩いたり、漁港に立ち寄りたり、三陸鉄道に乗ったりして絵を描く心に残る出会いを求めて旅をしました。しかし、2011年の東日本大震災には大きなショックを受けました。宿泊していた気仙沼、宮古、釜石等の宿、あの時歩いた漁港や浜も全滅。言葉では表すことのできない深い悲しみでした。

若い頃から自然科学が好きで、地球物理学系や宇宙関係の本を読んだり、話を聞いたりして未知の世界に想いを馳せていました。そんな思いが、「網」への興味から生命が誕生した海の中へと自然に流れていき、生きた化石と呼ばれるオウムガイやカブトガニ、ウミユリ、サンゴなどを描き込むようになったのです。

そして最近では、宇宙、大地をテーマとした絵に変遷していきました。アインシュタイン関係の本を読み、その中で「宇宙は膨張し続けている」ことを知りました。また、ブラックホールなど宇宙には想像できないほど不思議な未知の世界が広がっています。私の育った田舎では、夏には夜空の中央に天の川が美しく流れ、その中に白鳥座、わし座、こと座、南にはさそり座な

どが輝いていました。オリオン座から線香花火のように数多くの流れ星が飛び出るのを見ました。春夏秋冬変わる夜空、星座の物語が生まれた宇宙。一方地球では地殻変動が起きたり、マグマが吹き出したりで、太古の時代から生きている地球を感じます。

私は自然から受けた影響や、さまざまな体験から湧き出たイメージと現実の間で、絵筆をとっているのかも知れません。



「小春日和」F100 第30回主体展(1994年)

「東京都美術館に展示された自分の絵」

柿崎 覚

最初に主体展に出品したのは、武蔵野美術大学の2年生の時でした。

大学の図書館に主体展のポスターが貼ってあって、25歳以下出品料無料と書いてあったのでそれを見て出したいと思いました。

無料という言葉に惹かれたというはあるのですが、大学2年生の自分は、学内の人だけではなく自分の描いた絵を外に向けて発表したいと思っていた所でした。だからその時に見た主体展のポスターはちょうど良かったです。

その時に出品した絵は自画像と大学の授業で描いた風景画で、どちらもサイズが小さく、風景画の方は25号の絵でした。公募展に出品する絵は大きな絵という常識も何も知りませんでした。自画像は当時25歳の自分を描いたものでした。

風景画の方は大学内の好きな場所の風景を自分で探して描くという課題で描きました。大学の敷地の裏の方に、隣の朝鮮大学を隔てる壁があり、そこに落ちていた二つの朝鮮風の甕に魅力を感じ、それを何日かかけて描きました。その場所で雨の日もずっと傘をさして描きました。自分でも初めてとてもよく描けたと思える様な絵で、大学の先生からも褒めて貰いました。

その2点の絵を主体展に出品し、風景画の方が入選して東京都美術館に展示してもらった時の感動は今でも忘れません。主体の人と話した時「自画像の方もとても良かった」と言ってもらえた時とても嬉しかったのを覚えています。

公募展のことを何も知らず小さな絵を出したにも関わらず、認めてもらえたこと、そして入選したら絵を美術館に展示されるという事もよくわかっていなかったの、展示された時の満足感は今でも忘れられません。

その後で同じく主体の人に、「なんで公募展に絵を出したのか?主体の

ような団体に何故出したのか?」と聞かれた時に、「なんでも良いから何かを変えたいと思ったから」と答えたら「偉い!」と褒めてもらいました。

入選した時の事と、その時に展示してもらった風景画は忘れられない思い出です。



「甕のある風景」P25 第43回主体展(2007年)

「霧の中の記憶：主体展への道」

門屋 武史

主体展の初出品の頃を思い出そうとすると、既に20年近くの時が過ぎたせいか、淡い霧の中において視界が定かでないかのごとく、自分の記憶が少し薄れていることに驚きを感じます。

20代後半から絵を描き始めた私は、その当時、北海道の釧路に住んでいました。特に師もなく、我流で製作をしていましたが、田舎だったこともあり、作品の発表の場を求めて、札幌の公募展に出品を始めました。

運よくそこで数回、賞を頂き、2003年の授賞式に参加するため札幌へ向かうことになりました。私にとってこの移動は少し大変なことでした。なぜなら10代の頃から足が不自由だったため車椅子を使用しており、それなりに移動に伴う労力が必要だったからです。

しかし、まだ若く体力があったため、札幌市内の美術館やギャラリーを一人で巡り、うきうき気分で見守りながら美術鑑賞を楽しんでいました。そこで訪れたのが時計台ギャラリーです。偶然にも各ブースでは主体展の複数の作家が同時に個展を開催しており、一気に主体展の多様さと創造性の高い雰囲気を知ることができました。

深い衝撃を受けたのは浅野修先生の作品群でした。ひと目で先生の作品に強く惹かれた私は、会場に滞在されていた先生に向かって大きな音で驚かれないように車椅子の車輪を静かに回し、恐る恐る緊張しながら近づいて、話しかけたと記憶しています。

先生には優しく対応して頂き、舞い上がった私は自分が絵を描いていることや、賞の受賞式で札幌を訪れたことなどを告げたように思います。後日、別会場で展示されていた私の絵を先生に見ていただく機会があり、先生の話を聞くにつれ、私の中で主体展に出品するという強い気持ちが生まれました。

その数カ月後、私は主体展に初出品し、恐れ多くも賞まで頂き、今度は飛行機に乗り東京に向かったわけです。初上陸した東京の暑さに昇天しかけながら、なんとか美術館に到着し、パブロフの犬のように息をハアハアさせ

ながら会場内に突入、展示されていた大作の圧倒的な迫力に驚き、しばらく進むと自分の絵の前に到着しました。

身動きできずに眺めていると、ここに辿り着いた道程を思いだし、自然と心に強い感謝の気持ちが湧き上がってきたことを、私は一生忘れないと思います。



「月の位相」F100 第39回主体展(2003年)

「光栄と喜び」

グエン・ディン・ダン

2002年に東京のギャラリーで初めて個展をした後、東京の美術館で展示する機会を探し始めました。日本人の友人が、ある大きな公募団体を勧め、私は初めての大作「フードンの神」(F100)を応募し、入選しました。しかし、2002年の東京都美術館でのその団体の展示の仕方には不満を覚えました。作品タイトルが書いてあるキャプションには会員と出品者が分かるよう明記しており、会員の作品は全て良い場所に展示され、出品者の作品は上の階に押し込められていました。さらに、私の絵は、他の出品者の巨大な作品の上に掛けられていた為、ほとんど見えませんでした。それで、この2つの作品の位置を交換するよう主催者に要請しましたが、何の反応もありませんでした。

その頃、理化学研究所の奄美大島出身の先輩が畠さんを紹介してくれ、畠さんは2002年の主体展の招待はがきを送ってくれました。私はこの展覧会で、作品の質と、そして特に民主的な雰囲気が気に入りました。キャプションには会員の表示もありません。2003年の第39回主体展から作品を応募し始めました。この回で入選したのは「Threshold」(敷居)という絵です。その当時、主体美術協会の会員は123名だけでしたが、入選した作品数は174でした。私は第39回主体展で佳作作家として選ばれた16人の1人だったので、作品は巡回し、9月には名古屋の愛知県立美術館、10月には京都市美術館でも展示されました。主体展で2回佳作作家となり、2005年に主体美術協会の会員となりました。ですから来年で会員になって20年目になります。

私の大きな作品は、主体美術の会員であることで、日本人アーティストの作品と共に美術館で見る機会が得られ、日本での美術団体の活動や芸術家の生き方や制作活動を垣間見ることができました。主体美術の仲間たちは、とても親切で知的で、常にお互いを助け合う空気に満ちています。

私にとって、主体美術の会員であることは、とても光栄であり、喜びでもあります。

編集部から／原稿の原文は英語でした。是非グエンさんのホームページもお読み下さい。「Choosing to be An Artist (画家への道)」には更に詳しく綴られています。
<https://ribf.riken.jp/~dang/mystory.html> → Nihongo (Japanese) をクリック
<https://ribf.riken.jp/~dang/>



「Threshold」(敷居) 第39回主体展(2003年)

「初出品の頃」

篠田 正美

かすかに記憶をたどると、1973年大学卒業の年、第9回主体展に「スルメ」(F100号)を初出品、初入選だったと思う。郷里に帰っていたので、上京して展示を見る事はできなかった。友人が見に行ってくれて、彫刻室の階段のところの壁面に展示してあったと報告があった。昔の都美術館は階段を上がって行って、ギリシャ神殿のような柱が並んでいる風格のある建物であった。現在の国立博物館のような感じだった。随分昔のことであまり明確に覚えていない。ただ、出品・入選するのが目標で日々を過ごしていたような気がする。根岸先生にほめられた記憶がある。それが主体に出すようになったきっかけだったような気がする。いつ頃から上京して展示を見に行ったのか、レセプションに参加して、それが制作の励みになったのか、最近では10年くらい審査やレセプションに参加していない。体に自信が持たなくなっている持病が出て来た。

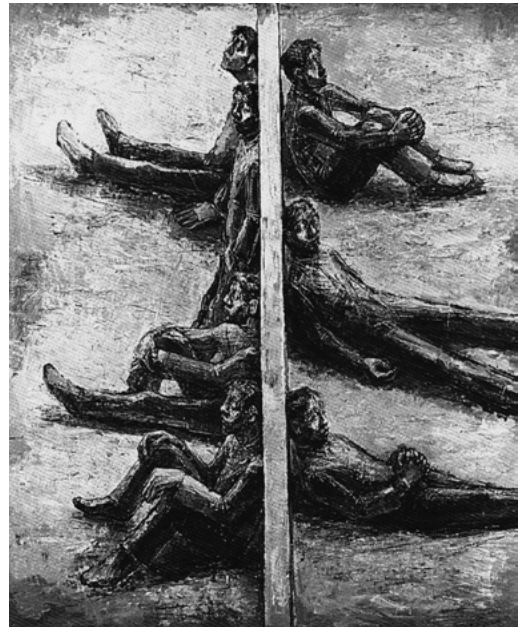
審査の日の昼休憩の時とか、レセプションを待つ時間は、上野公園をブラブラした。不忍の池の弁天島あたりや清水寺の舞台のあたり、動物園入口付近の食堂や鶯だんごが名物の食堂でおでんとビールを飲んだ。博物館のエジプトや中国の展示のある東洋館の一階の角に食堂があって、よくそこでビールを飲んで一休みした。サンドイッチを食べた。今でもあるのだろうか。

精養軒のレセプションではいろいろな画家に会った。胸に名札をつけているので誰かわかった。地方から出て来たので、せっかくなので勇気を出して話しかけた。ゲストで来られていた難波田龍起氏には「若い頃の絵は消したり破棄しないように。あの頃の絵は二度と描けないから」。糸園和三郎氏には「先生の作品は高校の美術の教科書に載っています。笠をさした多くの人が横断歩道の交差点を歩いている作品です」と言ったら「どの作品のことか分からない」と言っておられた。

審査の休憩中、目の前を片岡球子氏が車椅子を押してもらって隣の審

査会場に行かれたのを記憶している。休憩の時、豆大福がおやつに出ていた。地下の審査会場は、閉所恐怖症の私にとって余り居心地の良い場所ではなかった。今でも審査はそこで行なっているのだろうか。

最近では目標を持って日々を過ごすというのは生きる為に大切なことだと思えるようになった。これからも頑張ろうと思う。



「壁」F100 第21回主体展(1985年)

「『殉教者』の頃」

橋本 礼奈

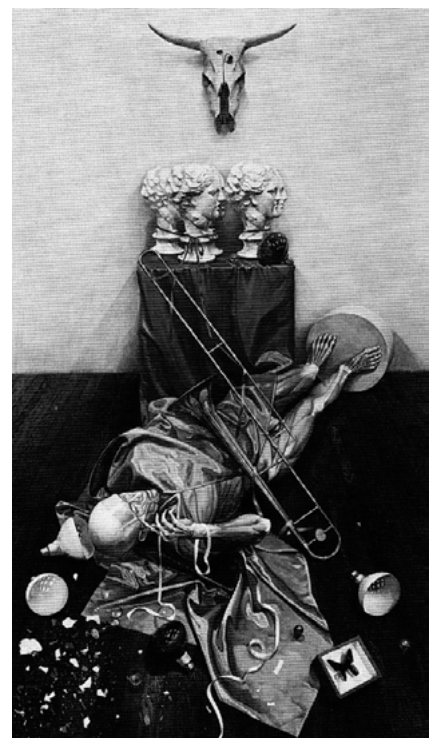
私の初出品と初入選は、1990年の第26回展でした。美大4年生、22歳の頃でした。当時は4年生になったらなんとなく団体展に出品するという風潮があり、流れに乗って私もどこかに出そうかなと思案していました。地元の親は「日展に出しなさい」の一点張りでしたが、迷った挙句、当時の担当だった教授や助手さんの所属していた主体展への出品を相談してみました。「うーん…出品したら一応推すけどね」という煮え切らないお返事でした。「それじゃあ、主体でいいや」という、実にいいかげんな動機で恐縮です。

私はそもそも展覧会を熱心に見てまわるタイプの子供ではなくて、いわゆる「画壇」に知識も関心もそれほどなく(今もないです)大学での実技も今ひとつ芽えず、友人関係でのつまづきや疎外感をおぼえる事が多く、さっさと卒業して地元に戻りたいなあ、と思いながらもわりと出席だけは真面目にしていました。ところが3年生でやっとモチーフを自由に組む静物画の課題をもらって、その面白さに目覚めました。モチーフ室から雑多な物を大量に借りてきて、「無意味で無機質な物の脈絡のない組みあわせを、さも古典絵画のように丁寧に一所懸命描いたらなぜかドラマチックに見えてしまう絵」はどうだろう? オリジナリティがあって面白いかも、というアイデアが浮かんだのです。卒業制作や初出品の頃の絵はそういう作品です。石膏像、人体模型、電球、無地の布等、情緒の少ないモチーフをアトリエに奇怪なインスタレーションのように組み上げて、大きな画面の端から端まで全力で舐めるように描いていました。

26回展初日が初めて主体展の会場を見た日でもありました。当時は確かに自分の絵が会場で異質に見えて、先生がたが頭を抱えた理由がわかりました。でもいくつかのとても心惹かれる絵と出会えました。日当たりの良い休憩スペースにリラックスしたムードのご老体たちが座っておられて、誰かに「ご挨拶しておいで」と言われました。創立会員の皆さんでした。和や

かに気持ちよく迎え入れてもらえた実感がありました。レセプションや二次会での会話がとてもエキサイティングだったのを憶えています。年齢や立場の違う人々が、上下の隔たりなく、作品への真剣さのみで戦っている、あるいは伸ばし合っている集団だと思えました。

その後も絵も環境も紆余曲折があり1995年の31回展で会員推挙していただいたのですが、文字量の関係で続きはまたの機会に。今や人生の時間の3分の2くらいを主体展とともに歩んでいる事になります。描いて、出すことが、もはや生きるリズムになっています。食事や呼吸のような感じです。



「殉教者」P120 第26回主体展(1990年)

「架け橋」

お母さんに会えてよかったね ——

短大の恩師、小谷博貞先生の声が、今でもはっきりと思い出されます。

主体展の初入選は初出品の1998年、28歳の時でした。会場で作品を見るまでは信じられない気持ちで札幌から上京し、神奈川で暮らしていた母を連れて東京都美術館に向かいました。小谷先生は私が母と一緒にいるのを見てとても喜んでくれました。

短大2年生の冬、母が家を出ました。小谷先生始め短大の先生には大変心配をかけました。自営業の父と、高校生、中学生、小学生の兄弟との生活で、毎日家事に奮闘しながら、気持ちはますます美術に没頭しました。短大の専攻科を修了後、生まれつき障害のある脚の3度目の手術に挑み、退院後は稼業の手伝いと家事の毎日。せっかく取得した教員免許は活かせずアルバイトを掛け持ちしながら、小さなグループ展だけはなんとか続けました。

落選続きだった地元北海道の公募展に7年振りに応募した初入選作がきっかけで出品を勧められた主体展に出会ってからは、それまでに知っていた、また思っていた公募展とはちょっと違った、平等で自由な団体の特徴に感動したのと同時に、入選できれば上京して、母と、その後離れ離れになった兄弟に会える。美術館をはしごして北海道には来ないような作品をたくさん見ることができる。年に一度の貴重な自由時間がとても楽しみになりました。会員になってからは審査もあるので2回も上京する理由が出来て嬉しかった。コロナ禍以前までは、父が病気で倒れた年以外は、毎年上京しました。

今年5月に自宅で介護していた父が急死してしまいました。神奈川で一人暮らしの母も病気が進んでいます。

諸事情で小さな絵しか描けませんでした。今年、5年振りに上京して、母を会場に連れて行ってあげることができるだろうかと考え、初入選の時くらい、緊張しています。

前川 アキ



小谷博貞先生と



「横切る風景」145.5cm×194cm 第34回主体展(1998年)

「初入選の喜び」

原稿の依頼を受けてびっくりしました。期日までに書くことができるか不安でした。私の人生で「昔」が80%で、「今」があと僅かしか無いのです。脳天気で自覚のなさが幸いです。

高校の絵画部の担任が、故山田光春(主体美術創立会員)先生で、髪型が似ているためか別名「スフィンクス」、いつも温厚で優しい父親のような大好きな先生でした。やがて成人した私は山田家のアトリエに通いレッスンの日々。帰りの夜にはメンバーと共に広小路(名古屋)の繁華街に繰り出し、並ぶ屋台の群れの中へ。奇声を浴びながら味も何も分からないコップ酒。それでも一人前になったような錯覚の中で無限の可能性に向かって、そんな青春時代でした。

そして年月が雲の流れの如く早く過ぎていきました。でも絵画への気持ちは消えることなく、デパートの個展巡りをしながら再度油絵に挑戦したいとの思いのつらさばかり。その時期に、故塚田重明氏(主体美術会員)に出会い、「主体美術協会とは？」が始まりました。

手元に20回展のモノクロの画集があります。その中に、5回展の時には「陳列作品には名札も付けず番号のみの表示方式を採用した」と記載されています。主体美術創立当時に諸先輩方の燃えるような熱い信念の表現です。あくまでも民主的で個を尊重し、自由で魅力ある作品発表の場であること。

しかし、時代の変化の激しい昨今、主体美術も難しくなりつつあります。あの頃の私は、恒例の主体展開催に心躍らせながら、名古屋から新幹線に乗り込み東京へ。上野の森は浮浪者のブルーシートの山、カラスが獲物を探してやかましい。そんな時、1989年幸運到来、初入選の知らせが届きました。この喜びは格別なもので、今でも忘れることのできない感動の瞬間でした。

入選作は「踊らぬピエロ」。躍動するピエロの中に孤独と哀愁、そして人

水野 博子

間讃歌へとキャンパスの中に発展していく。「今」も続く永遠の課題「心象の形象化」。人、人間を終生追い続けてやまない「今」です。

画材について思うこと。私は当初より油絵具を使用しています。あのネットリ感と絵具の重なりなどが私の肌に合っています。スローでじっくりキャンパスと睨み合う貴重な時間がそこにあり、意図しない形、色彩の表現に感動します。油絵具の匂いもテレピンの匂いも、私の日常の一部であり、主体美術に出会った自分の「今」に乾杯です。



「踊らぬピエロ」F100 第25回主体展(1989年)

※水野博子さんは、本年8月7日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りします。

『私の仕事 いま・むかし〈Ⅲ〉』

第59回主体展の企画室では「私の仕事 いま・むかし〈Ⅲ〉」を展示致します。

一昨年から始まったこの企画展、今年は35回(1999)~38回展(2002)の会員から16名の参加です。旧作と現在の作品を並べて見ることで、二枚の絵の間にある長い時間と、その間の作家の表現の深化に想いを馳せるのも興味深いのではないのでしょうか。主体展と共に歩んだ個々の作家の足跡と併せて、主体展の未来を展望する企画としてご覧いただければと思います。

(展覧会委員／藤田俊哉)

出品予定作家(敬称略・50音順)

阿部 正彦	豊福 光行	丸谷 恵
岡本 裕介	長沢 晋一	水野 博子
黒木 孝子	原田 文子	宮林 さわ子
齋藤 典久	藤田 俊哉	山田 礼二
柴田 かよ子	前田 博	
竹政 健任	松本 恵美	

惜別 「森田六男さんを偲んで」

桑原 雄一



プロフィール

1934年 高知県土佐清水市生まれ
1952年 武蔵野美術学校 中退
1965年 自由美術協会 退会
第1回主体美術展出品
会員となる。

1963年以降、個展、グループ展、
主体展、文化庁現代美術選抜展、
高知県出身作家展、その他出品

2024年 4月30日逝去(享年89歳)



▲「人の風景」F100(2022年第57回主体展)

森田六男さんと初めてお会いしたのは、平成29年11月に清瀬市で開催された第30回多摩北部5市美術家展(以下、多摩展)のパーティー会場です。大勢の出席者のなか、どこか威厳を感じさせ、一人佇む森田さんらしき方を発見しました。

第1回主体展に出品、会員という、大先輩、私にとっては、少々敷居の高い存在ですが恐る恐る声をかけてみました。以前から、人伝でオーディオとクラシック音楽がお好きだと伺っていたので、絵画の話題はもちろんですが、趣味を同じくする者としては是非ともお話をしたかったのです。私が主体美術の会員であることを伝えると、とても穏やかで、優しい笑顔となりました。あまり主体に顔を出していないとのこと、申し訳なさそうな表情でした。ひとしきり絵のこと、多摩展に出品している主体のメンバーのことなどお話をしました。話題を音楽に変えると、その表情が輝き、饒舌になりました。ブルックナーやマーラーがお好きであること、更にオーディオに凝っているようで、いくつもの私との共通点を見いだしました。初対面にもかかわらず、とても盛り上がったのです。

このとき、アトリエが所沢市の糀谷で有ることを知りました。そこは、同じ市内にある私のアトリエからさほど遠くなく、北は小手指ヶ原の古戦場、南には早稲田大学所沢キャンパス、更に直ぐその南は狭山湖で、お茶の産地として有名な狭山丘陵の中心です。「近くだから、是非遊びにいらっしやい」とのこと。私もそのつもりで、自転車で行くのがちょうど良いと考え、地図でルートを確認していました。ところが、いつの間にか時間が過ぎ、今回の訃報で、あのときの会話から既に6年もたっていたことに気がつきました。

初めての楽しい会話が最後となってしまいました。もっと音楽を聴きながらお話をしたかったのに本当に残念で悔やまれます。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

※以下に森田氏が寄稿された主体美術パンフレット「作家の原点を探る」(1990年)の文章を紹介します。

同居する音楽に

森田 六男

アトリエの奥に小さなオーディオルームなるものがある。アトリエの壁に音の通り路の穴を造って、絵の場所からは、オーディオ機器はみえないが、音だけが聞えてくるようにしてある、そこから聞えてくる音楽に耳を傾けながら制作をする。思えば制作中に音楽を流すようになって、もうずいぶんになる。今では音楽は仕事の一部にさえなっている。あれはいつごろだったか、上野の文化会館でロサンゼルスフィルとジュリーニによるブルックナーの七番を聴いて、たいへん感激しその帰りの公園口から山の手線に乗りこんだときに酒を飲んで大声を出す五~六人の連中にかこまれて逃げ出した時は、せつかくの気分を台無しにされ、こんなことがあると自分一人きりのレコードとの付き合いの方が良いものだとつくづく思った。

絵画においてもグレサム・サザーランドや、ジム・ダイン等も、自分に都合の良い解釈で引き寄せているように、永い間のレコードとの付き合い

も、いたって自分本位の都合良い方法で解釈をつけている。絵も音楽も、私の独断と偏見に満ち満ちている。ドビッシューやデーリアスの音楽を聞くと、素直にふるさとを思うのである。少年時代のもの憂い気分や四季折々の岬の表情など、大変都合良い解釈である。絵の一貫性や多様性は音楽にも同じく通じるものだと、私は思っているから。

たとえば、現代音楽の「階段の上の小川」とか「鳥は星形の庭におりる」とか「幼な子たちの古しえの声」などからみられるように、題名は具体的であるにもかかわらず、仕事は具体性から離れた所の根元的、直接的、内容である。自分の仕事も、その意味を表現しているの、同一のつながりだと思っている。

そのためには創意の途中違った形象が忽然と現れたり、消えたり、具象性の去ったものを求めながら、具象に戻ったり、主観的叙情(気分や気配)で実体をさがしたり、何度となく試行錯誤するが、底知れぬものがぐるぐる巡る不可解と云うものに、むしろ最近では憧れながら実体と向い合っている。

(「主体美術」1990年号より)

アトリエ訪問 vol.13

『福田 玲子さん』

—取手市のご自宅を訪ねて

図／福田玲子

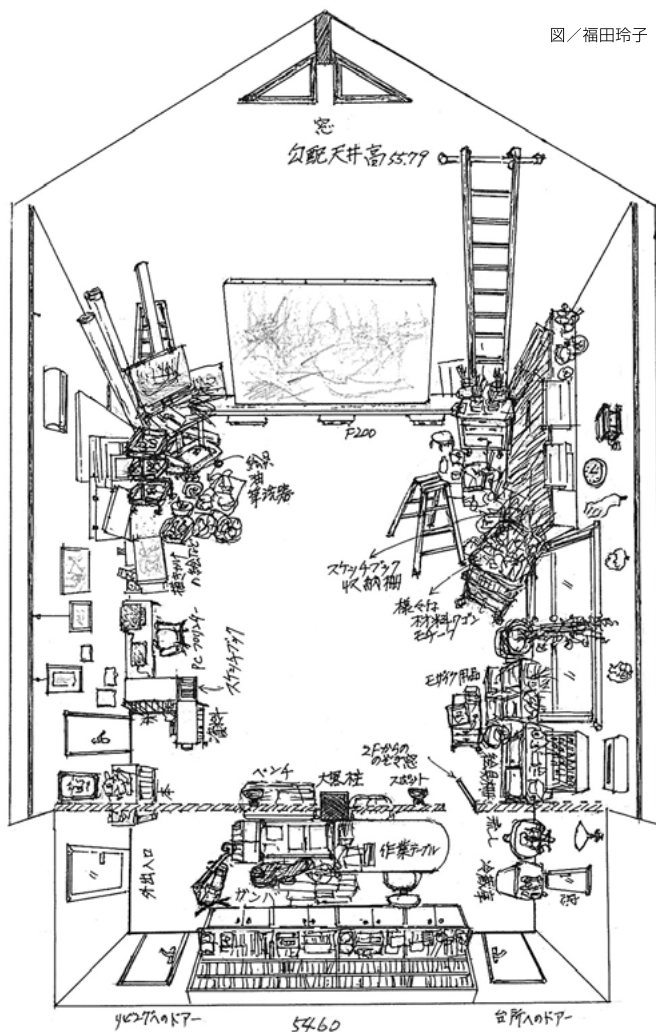


茨城県取手市小文間
取材／桑原雄一、落合梨乃
文／落合梨乃

◀白い車と妖精が住んでいるような家

▼2階窓から俯瞰した
200号のキャンパスがあるアトリエ

6月の晴れた日に待ち合わせをしていた。取手駅、ロータリーの向こうから白い車が向かってくる。福田玲子さんのかわいい登場だ。玲子さんのアトリエは東京藝術大学の近くにある。敷地に入ると、横にガレージ、その奥に煙突のあるご自宅。妖精がお茶会を開いていそうな優雅な外観だ。中にはいると、愛犬のポボが嬉しそうに迎えてくれた。人懐っこく、吠えない、トイプードルだ。保護犬である。おしゃれなリビングからダイニングを進んでいくとその奥にアトリエがある。



◆アトリエ

アトリエに入ってます、目を引いたのが今年の主体展へ出品する作品。もちろん描き途中だ。作品は手賀沼のそばにある鳥の博物館あたりの自然を描いたものだ。玲子さんは約5キロ以内の近間のところへ出かけて、たまたま出会って惹かれた自然を描いている。作品を制作するにあたり、写生を5、6回しないと描けないそうだ。玲子さんの描く自然の力強さ・美しさ・空(風)は、写生の時に感じたときめきが筆にのったものなのだとわかり、実物を目の前にして六感で感じとることの大切さを改めて感じた。

アトリエは24畳もあり、天井が5mと少しある。200号が悠々と収まる。大きい作品を遠くから見るために、隣の台所から見たり、2階の窓からアトリエを見下ろしたりしているそうだ。大量のスケッチブックが収められている棚、絵の具ひとつひとつが立てて収められた棚は絵の具のお家ようだ。その上にはぬいぐるみや人形などの可愛い生き物たちが行儀よく並んでいる。また、左右の壁面にはご自身の作品の他、いくつかの作品が飾られている。お父様がつくられた手ぬぐいの型、私の小さなリトグラフもあり嬉しい。

ポボがモチーフの作りかけのモザイクがあった。モザイクは東京藝術大学の先生にすすめられ2、3年前からはじめたそうだ。イタリアのラヴェンナのモザイクは砕いたガラスを用い、ローマのモザイクは砕いた石を用いるという。玲子さんは様々なものに興味があり、他にもフレスコや銅版画を行っている。後ろの壁一面の本棚には美術雑誌、百科事典、体験記などがあり、特に多くをしめているのが画集である。幅広い時代の日本や世界の画集が揃っている。今の私ぐらいの年齢(20代)のときに買い揃えた本も多いそうだ。好きな作家はゴッホとアンゼリム・キーファーで、気づいたらマチエールなどに影響を受けているとおっしゃっていた。4月にイタリアのフィレンツェへ旅行した際、偶然にもキーファーの展示があり見に行ったのだとか。

◆音楽

玲子さんは絵を描く時、クラシックを聞く。月～木曜日はNHK・FMでクラシックを流している。それがつまらない日は、CDを流しているそうだ。好きな作曲家はラフマニノフとチャイコフスキーである。

5、6年前から続けているというヴィオラ・ダ・ガンバを弾いてもらった。ガンバは、チェロに近い形だが、ギターのようなフレットがある。弓は箸のように持ち、膝に挟んで弾く、ヴァイオリン等より古い時代の擦弦楽器だ。低い音の響きがたまらない。ガンバとの出会いは、音楽の先生をしている娘さんの同僚がこの楽器の専門であり、展示のオープニング時に弾いてもらった時のことだ。

ガンバに触らせてもらった。私は幼稚園から小学校低学年までピアノを習っていたが、むいてないと確信し音楽から離れていた。ガンバに物怖じして情けない音を出してしまった。しかし、弓を優しく撫でるように動かす感覚は私にとって不思議で貴重な体験になった。



▲ヴィオラ・ダ・ガンバでテレマンの曲を弾く
玲子さん

アトリエ訪問の帰り、OMONMA TENTに寄った。ここは玲子さんの娘さんが経営するカフェを兼ねたギャラリー。2階部分は玲子さんの作品倉庫だ。カフェでマンゴーがのったクレープとコーヒーを頂いた。クレープは注文がはいつてからその庭で摘んだミントが添えられ、泡のようなクリームがかかっており新感覚で美味しかった。甘いものはつつい私の口を滑らかにする。いらぬ自分のことまで話してしまった。そんな話も楽しんでくれた玲子さんは最後に「またおいでよ」と声をかけてくださり、終始和やかな取材だった。ありがとうございました。

第58回「主体展」新会員展と会員小品展

返町 勝治

2024年2月8日から20日まで、ヒルトピアアートスクエアにおいて標記の展覧会が開催されました。2019年から画廊のご協力を得て2020年、2023年と3回にわたり「秀作作家展と会員小品展」を開催してきましたが、第58回主体展で13名の新会員が誕生したことから今回は「新会員展と会員小品展」を企画しました。

前年12月に入ってから急遽会期が決まったため、準備期間がタイトなスケジュールになりましたが、結果的に新会員展に9名、会員小品展に50名の方が参加されました。新会員展は会場のA室とB室を繋げてひとつの部屋にし、4号から100号までひとり平均約3点、計28点のそれぞれ多様な表現の個性豊かな作品が並びました。会員小品展はC室を使用し、4号以下の作品を50点展示しました。本展の大作とは味わいの違う作品も多く、新鮮な雰囲気を感じました。

搬入の際、前日に降った雪の影響で宅急便に遅れが出たため展示に間に合わない作品が5点ありましたが、作品を作者名のアイウエオ順に並べ、未着作品のスペースを空けておき、会期初日に届いた作品を無事展示することが出来ました。

会期／2024年2月8日(木)～20日(火)

会場／ヒルトピアアートスクエア

会場は東京都庁にほど近いホテル・ヒルトン東京の地下1階ショッピングアーケード内にあり、新宿駅からは地下通路でつながり、又新宿駅西口からヒルトン東京行きの無料シャトルバスを利用することも出来ました。

13日間の会期中に552名の観覧者がありました。最終日には搬出作業を終えた後に会場内でコロナのパンデミック以来出来なかった打ち上げをささやかに行うことが出来ました。暮れから正月にかけて何かと気ぜわしい中で案内はがき、ポスター、キャプション、デジタルサイネージ用データの作成に、また会期中一日2人ずつの受付当番、更に搬入時の開梱や搬出時の梱包作業に大勢の会員の協力があって充実した展覧会が出来ました。



第57回主体美術中部作家展

事務局 竹内小夜子

第57回主体美術中部作家展は令和6年3月5日(火)～10日(日)に愛知県美術館ギャラリー(E・F室)で小品展と併せて開催しました。展示内容は出品者26名、出品数35点、小品展は出品者22名、出品数30点でした。入場者は778名でした。

中部展では、各自新たな作品を作り出すための実験の場として活用しています。床に造形物を置き壁面作品との関係で表現を広げたり、画面を壁面に多数並べて、全体で自分の想いを表現したりなどの作品がありました。小品展では作家の大作では見られない色々な面を知ってもらう狙いがあります。見た人からは「この作家は小品がいいね。」と言う声も聞かれました。

受付付近には、図録・機関紙を販売する場所を作りました。主体の先輩の作品集や主体の歴史の資料なども置きました。関心のある人に主体を知ってもらいたいためです。長い間見ている人のために椅子を勧める場面もありました。

会期中に主体展に出したいがどうすればいいかの質問が有り、応募用紙を送る約束をしました。是非、59回主体展に出品してくれることを

会期／2024年3月5日(火)～3月10日(日)

会場／愛知芸術文化センター8階 愛知県美術館ギャラリー(E・F室)



願っています。他地域の会員の方にも来ていただき大変有難く感謝申し上げます。

中部のメンバーは最近、高齢化や新しい人が入らない事で減少しており、危機感を中部全体で持っています。魅力ある作品展にすることが一番大切なことかと感じます。1965年第1回主体展の翌年から始まった中部展を地域の会員の力を育てる場とし、地区の人々に美術の力で少しでも貢献できることを願い、これからも続けて行きたいと思います。



第56回主体美術神奈川作家展

事務局 長澤 弘美

さる3月5日から11日まで、横浜市民ギャラリーにおいて第56回主体美術神奈川作家展が開催され、好評のうちに無事終了いたしました。ご協力いただいた関係者の皆さまに深く御礼申し上げます。

横浜市民ギャラリーが関内駅前から今の場所に移転してちょうど10年になります。当時50名近かった出品者も年々少なくなり、今回は37名の参加にとどまりました。出品者の高齢化で直前に体調を崩された方や家族の介護でやむなく旧作を出品された方も居られました。一方で、今回神奈川県においては4名の新会員が誕生し、明るい兆しも見えています。

新型コロナも第5類の感染症となったことから、初日には会場研究会を開催し、多くの出品者に参加していただきました。そのあとのオープニングパーティーは、物価の高騰や地の利の悪さからホテルでのレセプションはあきらめ、近くのピザ屋で行いました。会費は参加者の自己負担とすることにより、出品料を据え置くことができました。

募集要項も見直し、出品サイズは一人幅3メートルまで、点数は自由にしました。そうすることで小品の複数展示を可能にしました。

会期：2024年3月5日(火)～3月11日(月)

会場／横浜市民ギャラリー

私が昨年の主体本展で一般受付をしていた時のことです。たまたま横浜の方が自作を持ってこられたので「もし入選したら神奈川展にもぜひ出品してください」とお願いしました。その方が本当に今回出品していただき、目を輝かせながら自作を語り、会員の作品に感動していた姿がとても印象的でした。

作品を通じて人と人がつながり、互いに競い合い励まし合って、この歴史ある主体美術神奈川作家展がこれからも続いていくことを期待したいと思います。

会期中の反省会では出品者の皆さまからいろいろな意見をいただきました。次回もより充実した展覧会にしたいと思います。



第52回主体美術武蔵野作家展

事務局 新野 安紀子

第52回「主体美術武蔵野作家展」は2024年4月9日(火)～4月14日(日)に埼玉県立近代美術館 第2・3展示室と廊下を利用した小品コーナーの展示で開催しました。

出品者は東京、埼玉、群馬、茨城の主体美術会員及び主体展入選経験出品者の構成で、今回は37名、展示室46点、小品コーナー23点の展示となりました。それから、長年武蔵野展に貢献された物故作家の本木エツ子氏の遺作を受付入口の壁面に遺作展として2点展示しました。いつも物静かに微笑んで励ましの言葉をかけてくださっていた姿が偲ばれます。晩年の作品「風の刻」は武蔵野展にいつまでも絶えることなく優しい風をそよがせて下さるようでした。

今回は会場研究会と懇親会を開催することができました。会場研究会は、個人的に会員に声かけしていく方法をとりました。来場した会員の方々も研究会に参加して意見交換した光景は主体ならではでしょうか。懇親会は美術館内レストラン「ペペロネ」にて開催。多くの出品者と来場した会員の方々も、引き続き懇親会へ参加して下さり盛り上がりました。会員からは他の展覧会や作家の面白エピソードの披露や

会期：2024年4月9日(火)～4月14日(日)

会場／埼玉県立近代美術館 B1階一般展示室2・3

昔の武蔵野展の様子のお話が出たり、また歌の披露があり盛況の内に交流を深めることができました。

第51回から展覧会のYouTubeの動画配信を始

めました。7月現在の再生数は第51回は約400回、第52回は約500回と少し増えています。実際に会場に足を運んで見に来て下さるのが一番ですが、近年の情報発信の変化に対応していくためには動画配信は重要になっていくのかもしれない。

近年、若い出品者が増えている一方で、会員の出品者が減少気味です。主体美術の発展と出品者育成の任を担う会員の出品が増えていくよう願います。



主体ちば作家展2024

事務局 肥田野 紅美

2024年度の主体ちば展は、4月29日(月)から5月5日(日)に船橋市民ギャラリーにて開催しました。今年度の出品者は24名でした。小品の出品者が多いため、本展の作品とはまた違った雰囲気の商品や実験的な作品が多く並びました。

昨年度から会期をゴールデンウィークの1週間に設定しました。その結果、働き盛りの世代も活動しやすくなり、会期中活発に意見を交わすことができました。また、ゴールデンウィークのお陰か、各地から例年より多くの会員の方にお越しいただきました。会期中の来場者数は、例年と同程度の約650名でした。

ちば展では会場内に個展スペースを設け、出品者の中から2名が展示を行っています。今年度は嶋村有美子氏と私、肥田野紅美が担当しました。前年度のちば展から1年間、緊張感のある制作をすることになり、実りある1年を過ごすことができました。自作を1室に並べ、ちば展に来てくださった多くの人に鑑賞・批評してもらえる貴重な機会をいただきました。

会期中の在廊時間は、会場への道すがら描いたスケッチブックを見

会期：2024年4月29日(月祝)～5月5日(日)

会場／船橋市民ギャラリー 第1展示室

せてもらったり、他愛もない話から普段の制作の源を垣間見たりと楽しい時間となりました。この穏やかで密な時間は、制作への刺激をもらえ、千葉の作家のつながりが生まれる大切な時間です。

会場研究会では、作家が自作について語り、出品者や来場者の方を巻き込んで意見を交わしました。さらに、今年度から会場でのレセプションも復活し、出品者持ち寄りの御馳走とともに、作品を前に語ることが出来ました。今後も現状に安住することなく、意欲的で自由な制作の場であり続けられるよう、出品者同士で意見を出し合っていきたいです。

船橋駅は東京駅から約24分です。ぜひ千葉にいらしてください。



'24主体美術関西作家展

事務局 見藤 瞬治

6月6日よりアートホール神戸(元町)にて'24主体美術関西作家神戸展を開催。梅雨の影響も何日ありましたが、例年のように盛況の内に終了することが出来ました。

今回は、特別企画として小品も取り入れて展示し例年と少し違う雰囲気にした結果「同じ会場に大小の作品を並べることで作者の姿勢がよりわかりやすい。」と好評でした。

昨年までの関西作家展は京都と神戸を巡回する形で開催していましたが、人員不足や予算不足が徐々に蔓延し、今回の神戸展をもって終了することになってしまいました。

思えば50有余年前(私が参加する少し前からの話ですが)、3人で始まった主体兵庫作家展。以来メンバーも増え、若手作家も多く、他の団体から羨ましがられるような元気な集団だったように記憶しています。やり方も様々。美術館のフロアを人数で仕切り各々が個展形式で展示したり、主体美術に関心のある人達も含めた「仲間たち展」や京都展と神戸展をまとめた「主体美術関西作家展」等。

それは徐々に進化し、近畿圏だけにとどまらず関西を超えて岡山・福

会期：2024年6月6日(木)～11日(火)

会場／アートホール神戸



井・広島・鳥取・愛媛まで特色のある地域をまとめた会となりました。ご存知の通り近畿6県は、それぞれが個性的で全く文化の違う地域の集まりであります。それが一つにまとまる面白さ、口では表現出来ない面白さ。終了は(巡回展も含めて)実に寂しい想いですね。

このことで、近畿一円から主体美術が無くなることは決して無いでしょうが、これからの課題は多いように思います。

展覧会記録

2024年1月末～2024年8月末

■北海道のアーティスト50人・冬展

(工藤悦子・永井美智子・前川アキ 他)

1月22日～2月4日

Retara SPACE(札幌市)

■第58回「主体展」新会員と会員小品展

2月8日～2月20日

ヒルトピアアートスクエア(西新宿)

■ちより/しば いろは二人展

「てんでこ。てんでこまい」

2月8日～2月13日

H-Gallery(所沢市)

■川端龍子の作品とともに観る大田区美術家協会の現在(井上樹里・山崎弘 他)

2月10日～3月3日

大田区立龍子記念館(大田区中央4)

■PARADE2024 -flower編-

(伊藤明美 他)

2月13日～2月18日

ギャラリー名芳洞(名古屋)

■WILL美術家展(アラキ・アツコ 他)

2月13日～2月18日

たましんRISURUホール(立川市)

■アートと音楽～アポロンの堅琴～

(桑原雄一 他)

2月20日～2月25日

Gallery美庵(銀座8)

■岩見健二油絵展 今を生きるパリを描く

2月21日～2月26日

日本橋三越本店本店館6階美術特選画廊

(日本橋室町1)

■シュルレアリスムと日本

(寺田政明・吉井忠 他)

3月2日～4月14日

板橋区立美術館(板橋区)

■第7回弥生の空に

(井上樹里・山本靖久 他)

3月4日～3月16日

始弘画廊(南青山5)

■第57回主体美術中部作家展

3月5日～3月10日

愛知県美術館ギャラリー(名古屋)

■第56回主体美術神奈川作家展

3月5日～3月11日

横浜市民ギャラリー

■第5回ヴェロン會(井上樹里 他)

3月9日～17日

三岸節子記念美術館(愛知県一宮市)

■第14回輪展(齋藤典久 他)

3月11日～3月16日

銀座K'sGallery(銀座1)

■續橋守個展-残されたものを凝視する-

3月18日～3月23日

ギャラリー暁(銀座6)

■矢野利隆個展

3月18日～3月29日

GALLERY SHIMIZU(横浜市)

■第9回自由律の俳人尾崎放哉との対峙

12名による絵画・彫刻展(齋藤典久 他)

3月24日～3月30日

ゆう画廊 5F-6F(銀座3)

■第3回二人展94-24(藤本卓 他)

3月25日～31日

あかね画廊(銀座4)

■第16回「個の屹立展」(福田和幸 他)

4月1日～4月6日

ギャラリー暁(銀座6)

■第52回主体美術武蔵野作家展

4月9日～4月14日

埼玉県立近代美術館 B1階一般展示室

2・3(さいたま市)

■Monochrome(長沢晋一 他)

4月15日～4月20日

ギャルリー志門(銀座6)

■佐藤善勇個展

4月18日～4月23日

ギャラリー芙蓉(八王子市)

■reunion 杉英行/渡邊俊行展

4月19日～4月30日

ART SPACE はね(熊本市)

■主体ちば展2024

4月29日～5月5日

船橋市民ギャラリー 第1展示室(船橋市)

■時のかたち展(中嶋修・結城智子 他)

4月30日～5月6日

横浜赤レンガ倉庫1号館2F(横浜市)

■「奏彩Ⅲ -7つの視点-(洋画)」

(山本靖久 他)

5月8日～5月13日

横浜高島屋7階美術館(横浜市)

■前川アキ絵画展-前進しながら 廻る旅

5月8日～5月13日

カフェ北都館ギャラリー(札幌市)

■Lento(大西佐頼 他)

5月19日～5月25日

SAN-AI GALLERY(東神田1)

■キリスト教美術展 at aoyama

(續橋守 他)

6月3日～6月15日

青山学院大学ジェンダー研究センター

ギャラリー(渋谷4)

■'24主体関西作家展

6月6日～6月11日

アートホール神戸

■永井美智子個展

6月11日～6月16日

大丸藤井セントラルスカイホール(札幌市)

■大野五郎作品展

6月15日～9月23日

北区飛鳥山博物館(東京都北区)

■第44回グループ風二人展

(塚本照子・田中和枝)

6月18日～6月19日

豊田市民文化会館(豊田市)

■「111の指標展」(長沢晋一 他)

6月18日～6月23日

中和ギャラリー(日本橋本町1)

■小林宏至展-ただ過ぎ去っていく-

6月19日～6月29日

ギャラリーアルトン(南青山5)

■アート'95展(アラキ・アツコ 他)

6月24日～6月29日

たましんRISURUホール(立川市)

■小野絵麻・二三・絵里展

-一人間・自然・宇宙 パートⅢ-

6月24日～7月6日

art space kimura ASK?(京橋3)

■第31回心に響く小品展

(藤田俊哉 他)

6月25日～7月7日

ギャラリーヒルゲート(京都府)

■第65回エコールド・エヌ盛岡展

(岡崎正治・種倉紀昭 他)

6月28日～7月3日

トーサイクラシック岩手(盛岡市)

■黒川洋展

7月7日～7月13日

ゆう画廊(銀座3)

■第35回記念豊田美術連盟展

(加藤嘉巳・田中和枝・塚田勉・塚本照子・

水野博子・森伊津子・山本弘子 他)

7月18日～7月21日

豊田市民文化会館A展示室(豊田市)

■玄木会 -中城芳裕と共に-

(中城芳裕・井上樹里・大西佐頼・落合梨乃・

金沢綾子・北村奈美・斎藤望・嶋村有美子・

竹越夏子・津田テリー直美・肥田野紅実・

藤本卓・マッキン・愛奈・山本靖久 他)

7月15日～7月21日

あかね画廊(銀座4)

■アンドウ・タナカ展(安藤豊 他)

7月22日～7月28日

月光荘 画室2(銀座8)

■開廊25周年記念ミニチュア100人展

(伊藤明美 他)

7月30日～8月11日

ギャラリー名芳洞(名古屋)

■clair-obscure

(井上樹里・小林宏至 他)

7月23日～8月1日

高輪画廊(銀座8)

■第12回<みすずかる光と風>展

(吉田正 他)

7月29日～8月4日

あかね画廊(銀座4)

■水戸麻記子絵画展 -何処かの景色-

8月14日～8月18日

札幌市資料館ミニギャラリー-2(札幌市)

■石井武夫と教え子有志たち展

(中城芳裕 他)

8月19日～8月24日

銀座 ギャラリームサシ(銀座1)

■久我英輔個展

8月19日～8月25日

あかね画廊(銀座4)

■小野由紀子展-樹海からアフリカへ-

8月31日～9月29日

静岡カントリー浜岡コース&ホテル

(静岡県御前崎市)

59回展イベントのお知らせ

9月1日(日) / 「アーティストトーク」 主体展会場にて
13:00～14:009月1日(日) / 「会場研究会」 主体展会場にて
15:00～9月1日(日) / 「レセプション」 レストラン・ミュージズ(都美術館中央棟2階)
18:00～20:00(17:30受付開始) 会費:6,000円
会務報告、佳作・秀作作家・新会員紹介、立食懇親会 等9月8日(日) / 「クワッキー会」 都美術館スタジオ(交流棟2階)
午前の部(一般) 10:00～13:00
午前の部(会員のみ) 14:00～17:00
参加費:1,000円 ※画材は各自持参
申し込み:先着30名(事務局宛にメールかFAXにて)

機関紙『主体美術115号』制作スタッフ

■事務局作業

齋藤 典久(責任者)

山田 礼二(機関紙部)

桑原 雄一(機関紙部)

黒川 洋(会計)

■執筆者

水村喜一郎

石井 晴子

伊藤 博昭

上野 信彦

多田 欣子

柿崎 覚

門屋 武史

■校正

落合 梨乃

返町 勝治

橋本 礼奈

前川 アキ

水野 博子

藤田 俊哉

桑原 雄一

■校訂

齋藤 典久

黒川 洋

藤本 卓

桑原 雄一

返町 勝治

藤田 俊哉

前川 アキ

榎本香葉子

他 執筆者

藤本 卓

桑原 雄一

返町 勝治

藤田 俊哉

前川 アキ

福田 玲子

※ホームページに展覧会情報の掲載を希望される方は、DMを事務局 研究部 小林 までお送りください。その情報は機関紙にも反映されます。(会員・出品者を問わず掲載いたします)

2024年度事務局体制

- 責任者/齋藤典久 ■会計/黒川 洋
■展覧会/山崎 弘・藤本 卓
■研究/小林宏至(DM受付担当)・井上樹里(ホームページ)・落合梨乃
■広報/【図録:出版】北村奈美・大西佐頼【機関紙】山田礼二・桑原雄一
【発送】坪井健一【広告】長谷川好美
◆巡回展/名古屋:竹内小夜子

2024年 第59回主体展 日程

- 本 展/東京都美術館(上野公園)
2024年9月1日(日)～9月16日(月)15日間(2日は休館)
公募搬入/2024年8月22日(木)・23日(金)
東京都美術館地下3階
名古屋展/愛知県美術館3F
2024年10月8日(火)～10月14日(月)

編集後記

■テレビをつけると、どのチャンネルもパリ・オリンピックの様子が放映されています。が、基本、日本がメダルをとった競技しか観ません。そんな中、オリンピックの競技種目に射撃/ライフル射撃、近代五種なるものもあるらしい、これらはスポーツなのかな? アトリエ訪問、以前、福田玲子さんからヴィオラダガンバを練習していると伺っていたので、あらかじめ準備していただきました。興味深く拝見し、弾かせてもらうことも…大きなアトリエに響く音色は深く落ち着きのあるものでした。(桑原雄一)

■今回の特集を「初入選の頃を振り返って」というテーマにしたのは、60周年を目前にしてあらためて初心を思い出してもらいたいからです。皆それぞれいろんなきっかけで出品に臨み、入選した時の喜びは忘れられないでしょう。自分の場合は、初出品で佳作作家になり喜んだものの、次に何を描いて良いか大いに悩み、産みの苦しみが続きました。なかなか順風満帆にはいかないものです。

原稿を依頼した水野さんが、8月に逝去されました。残念ながら今回の文章が遺稿となります。その文章を読むと「今」を大事に生きていらしたことがひしひしと伝わります。謹んでご冥福をお祈りいたします。(山田礼二)